

第3節 入学から卒業までを見通した系統的なキャリア教育の取組

高等学校では卒業後の進路も多様なことからコースや学科，系列科目選択等，生徒たちは自らの将来に関わる多様な選択を毎年のように迫られる。まさに高校入学の喜びもつかの間，生徒たちは自分が将来どのように生きるのかについて考えることを求められる。

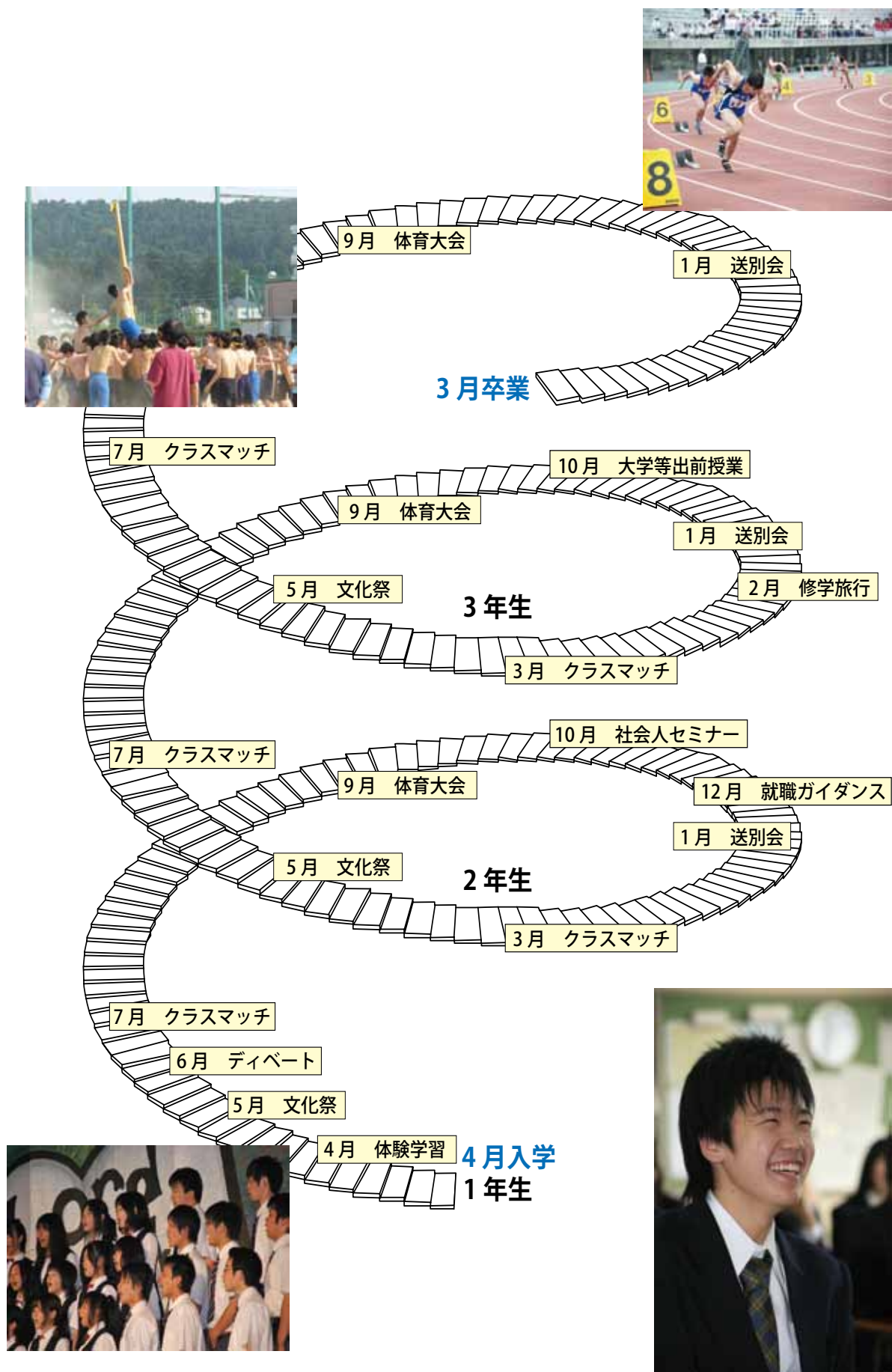
しかしながら，生徒たちにとって誰にも分からない将来について考えることは，決して容易なことではない。それは「正解が一つとは限らない問い」に取り組み続けるような，非常に困難な作業である。その意味でも，一人一人異なるキャリア発達を遂げる生徒たちを，個別に丁寧に指導・支援していく系統的なキャリア教育が求められている。

より効果的にキャリア教育が展開されるためには進路学習の中心となる総合的な学習の時間やホームルーム活動だけではなく，日々の授業，学校行事，生徒会活動や部活動においても教職員の共通理解のもとキャリア教育に取り組む態度が重要である。

例えば入学から卒業まで生徒たちは，次頁のような螺旋階段を上っていくかのごとくそれぞれの学年に応じた役割を果たしながら行事に取り組んでいく。

このような活動を通して自己理解の深化や他者との望ましい人間関係の構築を図りながら成長していく。このことはまさにキャリア発達において重要な要素である。だからこそ，日常のすべての教育活動にキャリア教育の視点を盛り込み，進路学習の諸活動を有機的につなげる必要がある。





第3章

第3節 入学から卒業までを見通した系統的なキャリア教育の取組

1 個に応じたキャリアカウンセリングの充実

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(平成16年1月)によると、学校におけるキャリアカウンセリングについては次のように述べられている。

子どもたち一人一人の生き方や進路、教科・科目等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、子どもたちが自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための、個別又はグループ別に行う指導援助である。

「自分は何に向いているか分からない」、「自分に合った仕事が見つからない」などの悩みを抱え進路相談にやってくる生徒がいる。それは自分に合った進学先や就職先のマッチング(答え)を求めている場合が多い。しかし、同じような悩みを抱えた生徒がいたとしても、悩みを持つに至った経緯や体験はそれぞれに異なっている。そのためにも適切な個別の指導・支援が不可欠である。

特に卒業時の進路決定に対するきめ細かな指導・支援を行うキャリアカウンセリングの充実は極めて重要であり、教師はその機会の確保と質の向上に努め、生徒たちの意識の向上や変容を促し、自己の可能性の発見や実現への更なる意欲を喚起できるよう育成することが求められているのである。

(1) キャリアガイダンスとキャリアカウンセリング

平成20年に実施された高校2年生を対象とした全国調査によると、「進路を考えるとときの気持ち」という問いに対して、半数近くが「自分がどうになってしまうのか不安になる」と回答している。((社)全国高等学校PTA連合会、(株)リクルート「キャリアガイダンス」共同調査)また、中学校・高等学校における進路指導に関する総合的実態調査(平成18年3月(財)日本進路指導協会)によると、普通科の生徒は、自分の将来の生き方や進路について考えるために、「自分の個性や適性を考える学習」「進路選択の考え方や方法」「将来の生き方や人生設計」「学ぶことの意義や目的」について指導してほしいと答え、卒業生は「自分の個性や適性を考える学習」「進路選択の考え方や方法」「社会人に必要なモラルやマナー」「産業や職業の種類や内容」を指導してほしいとしている。このように自らの将来の生き方について、生徒が学び考えるためのガイダンス機能の充実は喫緊の課題と言える。

学年やクラスなどの集団を対象としたキャリアガイダンスを実施する際には、生徒たちがガイダンスを通して何を感じ、それをどのように受け止め、どんな変容が生じたのかを、丁寧に確認しつつ次のステップに進めていくことが不可欠となる。しかし、生徒たちが一人でそれらを明確に把握していくことは、決して容易なことではなく、キャリアガイダンスの後に、一人一人の生徒の中に起きたことを丁寧に確認し、次の歩みをサポートするキャリアカウンセリングの機会が設けられることが望ましい。

(2) キャリアカウンセリングの進め方

① キャリアカウンセリングは誰が行うのか

キャリアカウンセリングには、カウンセリングの技法、キャリア発達、職業や産業社会等に関する専門的な知識や技能などが求められることから、こうした人材を学校へ配置することも一つの方策として考えられる。しかし、一方で全ての生徒たちに対する個別の支援・指導を充実させようとするならば、日々生徒に接している担任をはじめとする全ての教員が、キャリアカウンセリングに関する知識やスキルを身に付け、実践することが重要である。

② 基盤となる生徒との良好な人間関係と円滑なコミュニケーション

効果的なキャリアカウンセリングを行うためには、教師と生徒との間に良好な人間関係を構築することが不可欠である。それは日々の授業、ホームルームや学校行事など教育活動のあらゆる場面で行われるものである。特に日頃の声掛けや定期的な面談は、生徒一人一人を理解するために有効である。また、日常的に教員間で情報交換することも重要であろう。その意味で、全ての教員がカウンセリングの基盤となる生徒とのコミュニケーションを振り返り、円滑なコミュニケーションをとるための方法を修得することが欠かせないのである。

③ 正確な情報と知識の提供

キャリアカウンセリングを行う上で、欠くことのできないものが様々な情報や知識である。生徒に対して適切な時期に適切な情報を提供することは、非常に重要である。

まず初めに、生徒と教員の間で真に必要な情報や知識を明確にしなければならない。その上で、今が情報を与えるのにふさわしい時期であるか否かを判断して情報の提示あるいは探索をするか、その前段階として生徒の状態をより明確にする作業を行う必要がある。情報を提供した際には生徒の反応を確かめた上で、その情報についての評価を相互に確認し合うことが非常に重要であろう。また、教員が常に進路に関わる全ての情報を持っているわけではない。その際には率直にそれを認めつつ、生徒と共にその情報を探索し、同時に、必要な情報を生徒自らが手に入れる方法を伝えていくことも重要な作業となる。高校生の発達の段階を踏まえれば、生徒自らが必要な情報を選択・収集し活用する力を高めることが必要であろう。もちろん、教員も自ら常に様々な情報を収集し、知識を増やすことに努めなくてはならない。

④ キャリアカウンセリングの計画と校内体制

いわゆる「進路相談」と呼ばれるものは、卒業を控えた最高学年に行われるのが常であった。しかし、先述したとおりキャリア教育は入学時から卒業までを見通して進められるものであり、キャリアカウンセリングも入学時から計画的かつ継続的に実施される必要がある。その意味で積極的に活用されるべきものが、行事予定の中に定期的に設定される個人面談であろう。この面談の場で生徒たちが教師との適切なコミュニケーションを通じて、自らの思いや考え、迷いや悩みを自由に語れるようになることが、次につながる関係構築を可能にし、キャリアカウンセリングの継続性を生む。同時に、生徒がそれ以後自発的に教師に相談しに来る可能性を高めることにも通じるであろう。

また、入学してからの様々な学びや体験を通して、生徒たちの中に起きた意識の向上や変容を、最終的な進路決定につなげていくためには、生徒たちの変化を継続的・組織的に把握できる教員集団のサポート体制の確立は不可欠である。

⑤ 日常的な個別の指導・支援の重要性

このように計画的に実践される個人面談を通じたキャリアカウンセリングに並行して、日常的な個別の指導・支援の実践も不可欠である。例えば、以前は低かったコミュニケーション能力が少しずつ伸びてきている生徒に対して、「更なる一歩」を踏み出せるよう授業の中で意図的にその生徒に発言の機会を与えるなど、様々な方法が考えられる。また、休み時間中の教室や廊下での生徒との短い会話や、授業や部活動中の生徒の態度・表情などから、生徒の悩みや課題を看取することもできるだろう。そのような場合に適切な言葉をかけ、生徒が自ら来談する契機となるよう配慮することも、日常的な個別の指導・支援の重要な役割である。

(3) 卒業直後の進路決定をめぐる個別支援の考え方と進め方

高校卒業後の進路の決定には、様々な側面からの熟慮が求められる。保護者の期待や経済状況を含んだ家庭の事情、雇用の動向など、生徒個人によるコントロールが困難あるいは不可能な要素も視野に収めなくてはならない。しかし、それでもなお、生徒の進路を決定するのは、最終的にその進路を歩もうとする生徒自身である。進路決定時の指導において大事なことは、生徒自身が十分考えた末に自らの意思と責任で選択、決定したという実感を抱いてその進路を歩み出せるかということであろう。この段階を経ることにより、踏み出した先で出会う様々な出来事を受け入れながら、それに立ち向かっていくこともできるであろう。

卒業年次を迎えると、生徒たちは自らの進路希望を明確にすることが必要となる。しかし、その段階に至っても、個々の生徒の状況は様々であることを意識しておかなくてはならない。例えば、進路希望が決まっていないことに強い自責の念を抱く生徒もいれば、そのことに全く危機感のない生徒もいる。こうしたことを踏まえ、教師はこの時期に志望が決まっていることが当然であるという意識で生徒に関わるのではなく、一人一人の状況や考え方について十分に話を聞いて理解した上で個別に丁寧に関わることが必要であろう。

さて、自分の志望方向が明確になると、いよいよ具体的に志望する学校や企業を決めていくことになる。なぜそこを選び、そこで何をやりたいのか、そこに進んで将来どう生きていこうとしているのかなど、基本的なことを確認しながら生徒が自分の選択を冷静に振り返られるようにすることが必要となる。

選択肢を見いだせず、それ自体を問うてくる生徒の場合には、実際に一緒に探しながら、選択肢を探索する手掛かりを与えることから始める指導が考えられる。探索の方法を知ることで、選択肢が広がり、比較検討する視点などについても意識するようになるであろう。このようなプロセスは、単に進路先を決めることに通じるだけではなく、将来、様々な意思決定の場面で、それを生かすことができるようになることも目指すものであり、選択や意思決定の方法についても生徒に自然と意識させるようにしたいものである。

また、進路決定には、自分が「やりたいこと」と自分に「できること」との間に、何かしらギャップが存在するケースが多い。したがって、進路決定援助のプロセスは、生徒が納得できるよう「自己理解」を明確にし、今までの様々な「体験」なども踏まえ、「進路情報」を整理して「進路決定」できるよう援助するプロセスとも言える。つまり、このプロセスは在学中に積み重ねたキャリア教育の成果が集約される活動とも言え、まさに「刈り入れの時」なのである。入学から卒業までを見通した系統的なキャリア教育の実践は、卒業直後の進路決定をめぐる個別支援の基盤としても不可欠と言えよう。

キャリア教育は、生徒が社会人・職業人として自立し、時代の変化に力強くかつ柔軟に対応していく資質や能力を身に付けることを見通して行われる。したがって生徒たちが卒業したことで終わる指導ではないことは明らかである。しかし、現実的に卒業した生徒をフォローすることは容易ではない。その解決のためには在学中の生徒たちと教師の良好な関係を保っておくことが大切である。まず教師自身が卒業生の動向に対して関心を持ち続け、生徒たちがいつでも教師に連絡が取れるようなネットワークを学校として構築することが求められていると言えよう。

2 体験的な学びを生かした取組

社会を構成する一員として自立を目指すためには、学校以外の地域等との連携は欠かせない。社会的な体験などを通じた異年齢や多様な立場の方々との関わりは、新たな社会への関心を引き出すとともに、生徒が職業観・勤労観を形成・確立する上でも欠くことができない。体験的な学びを通して、自己と社会の双方について多様な気付きや発見を経験させ、自らの将来を考えさせることにより、進路の研究、自己の適性の理解、将来設計の具体化につなげることが求められている。

特に、インターンシップは、将来進む可能性がある仕事や職業に関連する活動をいわば試行的に体験し、これを手掛かりに社会・職業への移行準備を行うことが中心的な課題となるが、進学希望者であっても、「大学の向こうにある社会」を意識させ、自己の将来について考えさせる観点から、大学等の研究機関、行政機関、医療機関等、地域や各学校の生徒の実状等に配慮し、幅広く開拓することが必要である。ほとんど全ての中学校で職場体験活動が実践される今日、それぞれの高等学校では、生徒の発達の段階に応じたインターンシップの取組が求められる。(インターンシップの実践方策については、本『手引き』第2章第6節 p.109-p.118を参照のこと。) 無論、高等学校におけるキャリア教育の一環として推進されるべき体験的な学びの機会はインターンシップに限定されるものではない。入学から卒業までを見通しつつ、学校や学科の特質、生徒の実態、地域の実状等に応じて多様な体験活動を組み入れ、系統的・体系的に生徒一人一人のキャリア発達を支援することが求められる。とりわけ、職業生活に密接にかかわる学習機会が乏しい傾向にある普通科においては、一層の創意工夫が期待されると言えよう。

高等学校におけるキャリア教育の一環としての体験的な学びの例

- ① 職場や研究機関の訪問・見学
- ② 地域の職業人に職業・生き方を学ぶ調査活動
- ③ インターンシップ
- ④ デュアルシステム
- ⑤ 熟練技術者を学校に招いての技術指導
- ⑥ 学校オリジナル商品の開発と空き店舗等を利用しての販売
- ⑦ オープン・キャンパスや上級学校の授業の受講（出前授業・出張講義を含む）
- ⑧ その他の体験活動
 - 奉仕・ボランティア活動
 - 保育体験や育児体験
 - 福祉体験や看護体験
 - 自然体験や農業・漁業体験
 - 国際理解にかかわる体験

体験活動の充実に向けての改善ポイント

- 学校教育全体における位置付け
(学校の活性化に向けてのキャリア教育の推進)
- 指導計画の改善と見直し
(工夫ある全体計画, 指導計画, 題材系統図等)
- 学びと社会との関わりの視点
- 体験活動のねらいの明確化
- 体験活動の在り方と工夫 (日数・回数)
- 地域性を生かした体験活動
- 関係諸機関, 行政, NPO団体等との連携
- 保護者との連携や活動参加への工夫
- 学校の指導体制, 組織の工夫
- 体験活動の評価の在り方
- 体験活動の事前・事後指導の充実



期待される効果

仕事や働くことへの関心が向上する
前向きに自己の将来を設計することができる
自らの意志と責任による進路選択ができる
積極的に人間関係を形成し、協力・協働してものごとに取り組む

高等学校における体験活動

- ・ インターンシップ：将来進む可能性がある仕事や職業に関連する活動をいわば試行的に体験し、これを手掛かりに社会・職業への移行準備を行う
- ・ 職業人インタビュー・社会人講話：職業人の持つ職業観や勤労観に触れる
- ・ 奉仕・ボランティア活動：自発性の育成と継続的な関わりを学ぶ
- ・ 介護体験・福祉体験：高齢の方や障害のある人との関わりを通して、ノーマライゼーションの理念を学ぶ
- ・ 自然体験：自然との共存や環境問題を考える など

中学校における体験活動

- ・ 職場体験活動
- ・ 職業人・社会人講話
- ・ ボランティア など

小学校における体験活動

- ・ 職場見学
- ・ 学校たんけん、町たんけん
- ・ 1/2 成人式 など

【実践例】《特別活動（ホームルーム活動・学校行事）》

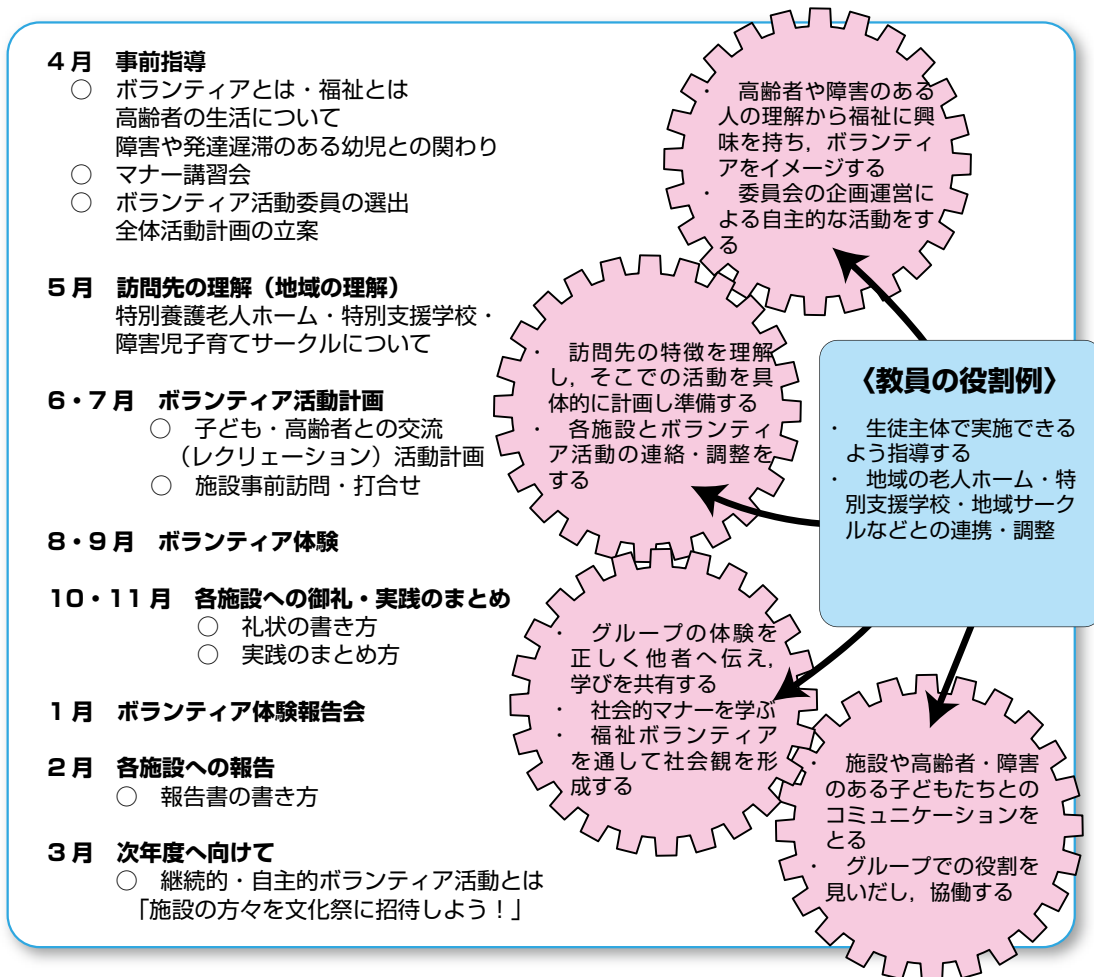
題材名 福祉ボランティア活動を企画しよう

■ ねらい

高齢者や発達の遅れのある子ども達との交流を通して、加齢や障害について理解を深めるとともに、他者を思いやる心や共に豊かに生きていこうとする力、福祉に関する問題を主体的に解決しようとする態度と実践力を身に付ける。

■ 本実践とキャリア教育

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
<ul style="list-style-type: none"> 社会人として役立つ挨拶、マナー、コミュニケーション力を身に付ける。 他者に対する思いやりや他者を受け入れる態度、思いを伝える表現方法を身に付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア活動で喜びを感じ、社会での役割を担う自信と希望につなげる。 自己の感情をコントロールしながら、自己の役割を担う。 	<ul style="list-style-type: none"> 訪問先を研究した上で、ボランティアを企画し、実践する。 グループでアイデアを出し、具体的に活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 福祉の現状や課題を知り、互いに支え合う社会の仕組みを考えることで、社会の一員であることを自覚する。



実践のポイント

ボランティア活動は他人のためだけではなく、自己の喜びや成長につながることを理解させ、生徒の主体的な活動にすることが重要です。また社会への参画方法を学ぶことは、社会における自己の役割や自らの進路を見いだす力となり、学習意欲の向上につながります。